

漢陽大学校東アジア文化研究所・神奈川大学非文字資料研究センター

学術交流提携記念

2011 年度 第1回公開研究会

京城の都市・建築そして生活



日 時: 2011.12.16 (金) 13:00 - 16:30

会 場: 神奈川大学横浜キャンパス16号館 地下1階 視聴覚B室

【モダン京城の都市と建築～展覧会／本町・鐘路】

漢陽大学校建築学部 教授 富井正憲

◆【展覧会】

このたび横浜の神奈川大学で「モダン都市京城の巡礼 鐘路・本町」の巡回展が開催されたことにお礼申し上げます。本巡回展は今年3月のソウル市清溪川文化館、そして10月の駐日韓国大使館韓国文化院に引き続き、第3回目となる。

1920年代中頃の京城（現ソウル）には朝鮮総督府、朝鮮神宮、京城府府庁舎、京城駅と主要な建物が次々と登場した。そして1929年には施政20周年を記念して景福宮内で大規模な朝鮮博覧会が開催され、半島の内外から多くの観光客が京城を訪れることになる。1930年代の京城は商工業が発達し、都市の人口が急激に増加してくる。当時の映像『京城』には市内に官公庁や学校会社の大規模な建築から日用品を扱う小さな商店や住宅が建ち並び、百貨店、お土産屋、劇場、ホテル、動物園、植物園、野球場、競馬場、ゴルフ場などの観光娯楽施設から大きなショーウィンドウ、夜市場、街灯等々モダン京城の昼夜の都市風景がよく映し出されている。またこの時代には旅行者用に案内本やパンフレット、それに絵葉書もたくさん出された。

こうしたビジュアルでオリジナルな成果物を用いた非文字資料による今展示会は、訪れる人々に1930年代のソウルの都市空間とその市民の生活を知ってもらう契機となり、かつ、当時そこで生まれ育った人々には記憶の再現と自己確認の場となってくれることと考える。

またソウルを代表する北村、南村の復元した2つの通りの実証的な基礎的成果物は、都市や建築の研究者には勿論のこと、映画、文学、経済等の他分野の研究者にも貴重な学際的資料を与える機会になると信じている。

これまでの復元製作過程と巡回展では当時をよく知る方々に復元地図をご覧いただき、貴重な指摘や資料をいただいているが、更にこの巡回展を通して当時をよくご存じの方々との出会いが生まれ、若い研究者がこの展覧会から育ってほしいと願っている。その意味で歴史地図製作作業はこれで終了したわけではなく、本巡回展が出発と位置付けている。

「モダン都市京城の巡礼 鐘路・本町」展は

- ① 「京城」という言葉が使われた初めての日韓両国での巡回展であること
- ② 1930年代の一般市民の都市生活、文化を照準にしていること
- ③ 展示のキーワードは「比較」である。市民と観光旅行者とによる人間比較、「鐘路」

と「本町」による朝鮮人商店街と日本人商店街の空間比較、1940 年の「京城」フィルムによる現代との時間比較

④ ビジュアルな展示構成～地図、図面、映像、絵葉書（模型）

以上の4つの大きな特徴をもつ。

研究は正確な記録と復元を目指して次のように進められてきた。

1986 年にスタートした鐘路本町両商店街通りの地図の復元作業は詳細な地番入り地籍図がなかったために「京城地形明細図」と「京城府管内地籍目録」（1927 年発行、1917 年発行）を入手し、その地籍図を 1 枚 1 枚つなぎ合わせ、拡大して地番入りの鐘路・本町 2 通りの街路・街区図を作成することから始まった。出来上がった 2 つの街路図をベースにして、長さ、幅員、勾配、形状、路面状況等についてとりあげ、街路・街区の構造を検討するとともに京城府の歴史、案内、便覧、調査報告書等の文献資料を用いて、2 つの通りの利用状況、土地所有者、土地価格について分析し、鐘路と本町の比較考察を進めた。

次に鐘路と本町の商業構成の検討と当時の商店街地図を作成するために、電話番号帳、商工名録、商店街調査資料、写真帖、絵葉書等の当時の文献を併せ用いて、この資料の中から両地域の商店を抽出する手順を踏んだ。商店ごとに商号・氏名・国籍・業種・地番等の入ったデータ・ベースを作成し、鐘路通り 1439 件、本町・新町通り 1725 件、2 つを合わせた総データ数が 3164 件にのぼり、その結果を用いて業種別・各丁目別特徴を分析している。地番の判明している商店は、作成した地籍図にプロットして当時の商店街図を作成して当時の商店街を正確に記録し復元するようにした。特に既存の商店街構成図、地番入り地図、及び商店記入地図とのすり合わせ補填が重要で、「鐘路式参丁目商店街構成図」（南側 135 軒、北側 134 軒 合計 269 軒）（京城府商店街調査、京城府、1936 年 8 月）、「本町一・二丁目商店街構成図」（南側 103 軒、北側 108 軒 合計 231 軒）（京城府商店街調査、京城府、1936 年 8 月）、「京城精密地図」、「龍山精密地図」（計 2 枚 色刷り 縮尺 4000 分の 1 1933 年発行、三重出版社京城支店発行所、白川行晴著作兼発行者）、「地番地区入大京城精図第 5 号」（1 枚 縮尺 6000 分の 1、1936 年作成、至誠堂発行）を用いている。併せて建物の図面、写真、絵葉書、広告等の他データのチェックを行ってきた。

地図製作作業の過程でその地域で生まれ育った人々に復元地図のチェック確認をしていただくことにし、日の出小学校同窓会「京城日の出会」、桜井小学校同窓会「さくらい」幹事尾実氏（本町 5 丁目・雀のお宿）、三坂小学校同窓会「鉄石と千草」記念誌編集委員とコンタクトを持たせていただいた。更にその時に貴重なイメージマップの提供も受けた。

写真その他非文字資料については『大京城写真帖』（1937 年発行、中央情報鮮満支社編出版、1987 年に宮塚利夫現山梨学院大学教授より複写本を入手）、『大京城都市大観』

(1937 年発行、朝鮮新聞社発行所、和田重義著作・発行人。題名は異なるが内容は『大京城写真帖』と全く同じ)、当時の絵ハガキ及び各店広告は 20 年以上にわたって古書店を中心に収集してきた研究者個人所有資料を中心としている。鍾路本町の現況商店街パノラマ写真は 2010 年と 2011 年の街路樹が落葉した冬の時期の写真を合成作成した。また松竹株式会社に特別許可をいただき、フィルム「京城」(1939 年、清水宏監督、朝鮮総督府鉄道局、松竹制作)の放映を会場で行っている。この他には、1930 年代を中心にした案内書等は個人及び学習院大学、東京経済大学、韓国の図書館博物館が所有している『大京城』(朝鮮毎日新聞社、1929 年)『京城と仁川』(大陸情報社、1929 年)『新版大京城案内』(京城都市文化研究所、1936 年)『京城情緒 上下』(京城観光協会、1936、1937 年)を主に用いている。

建築図面は月刊誌『朝鮮と建築』(1922 年～1945 年各月号、朝鮮建築会発行)から選択している。なお、月刊誌『朝鮮と建築』全巻(公的機関欠号の創刊号と最終号は牧園大学金晶東教授より 1986 年に複写本をいただき、全巻揃う)の建築物情報のデータ・ベースは 1987 年に私が神奈川大学在籍中に学生諸君と作成して公開発表し、現在は韓国でも研究者に広く利用されている。

最初の成果物の公開発表は 1988 年の日本生活文化史学会大会において『本町通りと鍾路通りについて～日本時代のソウル都市論』のタイトルで行った。その後新たな研究者を迎え、写真や広告の追加資料を補充し修正を加えながら作業をすすめ、2010 年に財団法人韓哲文化財団の助成を受け、本巡回展に到っている。

なお我々の研究とは別に、本展示会より 4 年前の 2007 年に東京大学大学院の博士(工学)論文で金銀眞さん(現東京大学研究員)による鍾路の復元研究発表がありましたことをここにあわせて紹介しておきたい。

本巡回展の主な展示物は以下の通りである。

- ① 1930 年代北村鍾路通り商店街復元地図＋現況パノラマ写真(縮尺 1/300)「光化門～東大門」
- ② 1930 年代南村本町通り商店街復元地図＋現況パノラマ写真(縮尺 1/300)「本町 1 丁目～新町」
- ③ 絵葉書、精密地図、鳥瞰図
- ④ 当時の京城案内文、交通案内図
- ⑤ 建物図面と概要説明文、商店建物位置図、商店街調査表
- ⑥ 地図作製に用いた当時の出版物(電話帳、商工名録等)
- ⑦ 1940 年制作清水宏監督の映画「京城」と現在の比較映像
- ⑧ 復元作業過程の資料と発表論文

◆ [本町・鐘路]

本町は 1882 年に日本の公使館がソウル南山の城郭内の北面山麓に置かれ、その周辺が日本人居留地に指定されてから生まれた街である。日本時代に京城（現ソウル）内で最も繁華な街として日本人銀座街とよばれ、本町の漢字をデザインしたゲートとすずらん模様の街灯が特徴で、内地の銀ブラならぬ「本ブラ」という愛称で府民や観光客に親しまれた。現在は忠武路と名前を変えながらもソウルの繁華街明洞に隣接して、旧本町 1 丁目地域は今も繁栄している。しかし他の地域は僅か一部分に当時の街区構造と建物を残しながらもすっかり衰退し面影も少ない。

鐘路は朝鮮王朝時代初めにつくられた街で、植民地時代には本町に対比して朝鮮人の銀座と呼ばれた。朝鮮王朝時代には鐘路 1 丁目に六矣廬（王朝特別許可の六種の商売）が置かれたために、早くからソウルの商業の中心として商いが活発に行われ、市も開かれた。城郭内を東西に走る幅広い鐘路通りは現在も市内有数の道路として、基本構造を存続しながらそのまま使用され続けている。日本時代には地上に路面電車が走っていたが、現在は代って地下に地下鉄一号線が走っている。

日本時代の二つの通りの特徴を具体的に説明してみよう。

本町通りは南山北面のすそ野を西から東に細く延びる。朝鮮銀行前ロータリー広場から 1 丁目が始まり 5 丁目まで続き、その長さは約 1.8 km である。さらにその先の新町遊廓を加えると 2 km ほどの長さになる。道の幅員は 3.6m から 7.3m の間で狭く、起伏もあり、蛇行している。路面は簡易舗装仕上げである。

鐘路通りも本町通り同様城内を西から東に流れる清溪川に平行して位置する。景福宮前光化門通りの交差点から 1 丁目が始まり、東大門の 6 丁目まで続き、その長さは 2.8 km にわたる。道幅は約 27.5m から 29.0m と広く、路面は硬質舗装仕上げで、平坦で真っ直ぐに延びる。

清溪川を境にした南村の本町と北村の鐘路の 2 つの通りの性格は大きく異なる。これは 2 つの通りの成立過程に原因する。本町通りは朝鮮王朝時代には存在せず、日本人居留地に指定されてから自然発生的に延びてできた道である。これに対して、鐘路通りは朝鮮王朝時代に都が定められた当初よりあらかじめ計画された道路である。

2 つの通りの一日の交通状況を見ると、通行人の数は本町 1 丁目が 17,239 人、鐘路 2 丁目が 15,033 人とともにさほど違いはない。本町には電車、客馬車、牛馬の交通はない。道幅が狭いため、自転車、人力車、サイドカー等の小さな一般用の乗り物が多い。1927 年の都市計画調査時には車が通っていたが、これも 30 年代には禁止された。これに対して鐘路通りは市電や車の往来が多く、かつ荷馬車、手引車、牛馬、荷担ぎ人等の作業用人車が多く認められる。

街区についてみれば本町は 1～5 丁目の 5 つの区域、鐘路は 1～6 丁目の 6 つの区域から構成されている。本町の街区形状は不定形であるが、鐘路においては比較的東西に細い長方形が並んでいる。また宅地割についてみると本町はさまざまな変形の敷地が多

いが、鐘路は短冊形の敷地が規則正しく配置されている。とくに 1, 2, 3 丁目はその短冊形が多い。総面積は本町が 6 万坪弱であり、鐘路が 7 万 4 千坪ほどである。鐘路が本町の 1.2 倍の広さを持つ。

それぞれ各丁目の面積を比較してみると、鐘路 1 丁目が最も小さくて、最も広い鐘路 6 丁目の約 10 分の 1 にすぎない。人口密度は本町 3 丁目、鐘路 3 丁目が高く、反対に本町 5 丁目、鐘路 6 丁目が低い。平均すると本町と鐘路におおきな相違は見られない。

本町と鐘路の土地平均価格を較べると、本町が 1.4 倍ほど高い。各丁目ごとにみると本町は 1 丁目から 5 丁目へと徐々に地価が下がっていく。これに対して、鐘路は 1、2、3 丁目が高く、4、5、6 丁目が低く、3、4 丁目を境にして 2 つの地域ではっきりと価格差が認められる。

土地所有者についてみると、1917 年から 1927 年の 10 年間に土地所有者の数が本町で 1.5 倍に、鐘路で 1.7 倍になっている。これは土地の細分化を意味する。会社及び官公庁所有の割合が大きくなっていくなかで、朝鮮人個人所有の割合が減少する。特に本町での割合が 2% にも満たなくなる。朝鮮人の銀座と呼ばれた鐘路でも 2 割も減少している。

次に商業空間について取り上げよう。

商業構成について分析すると、本町・鐘路共に買回り品の割合が高い。特に本町では文化品類が多く、鐘路では呉服・洋服商を中心とした衣料品店が多数を占める。鐘路に衣料品類が多いのは朝鮮王朝時代より続く六矣廬の影響と考えられる。この他に本町は飲食店や写真・印刷の加工修理業が多い。これに対して鐘路は材木・炭等の原材料店が多い。本町 1 丁目には京城府に当時 5 軒あった百貨店の内の三越百貨店・三中井百貨店・平田百貨店の 3 軒が集中している。また入り口には郵便局や銀行等の公共建物が並び、まさに京城の商店街の中心的な街であったことがよくわかる。本町 2 丁目には文化品類が 53 軒も建ち、本町全体の 4 割弱がここに集中する。3 丁目になると食料品店が多く並び、通り全体の食料店の 5 割を占める。4、5 丁目は住宅の割合が増える。また 5 丁目には 4 軒のおでんやははじめ、飲食・サービスの店の割合が高くなる。

本町通りは 1 丁目から 3 丁目にかけては家族で買い物や食事を楽しむ商業空間が続くが、4 丁目から 5 丁目になるとその先に新町遊廓が続くこともあって、一杯飲み屋やカフェが並び、男客たちが往来する夜の空間に移り変わっていく。線的变化に富んだ通りである。

鐘路は 2 丁目がもっとも繁栄している。各丁目の商店数は 1 丁目が 145 軒、2 丁目が 252 軒、3 丁目が 127 軒となるが、4、5、6 丁目はそれぞれ 100 軒を下回り、2 丁目の商店数が他に比較して高い。土地価格のことも考え合わせると、2 丁目が鐘路の通りの中心であることを示している。分野別にみると 1 丁目に金融・事務所が集まっている。2 丁目には和信百貨店をはじめ衣料品、文化品、飲食店が数多く集中し、更に病

院、教会関係の施設や市民の集まる公園もこの2丁目にある。日が暮れるとこの2丁目の歩道部分を中心に100軒以上の夜の市場が出店し、にぎわった。

◆【建築】

本展示物の中から当時の京城の1930年前後の商店建築の性格がよくうかがえる3つの建物を紹介しておきたい。いずれも雑誌「朝鮮と建築」に発表された作品である。

【本町ビルデング】

本町ビルデングは本町2丁目3番地の角地に位置する地上3階地下1階の鉄筋コンクリート造である。本町に事務所を置く相澤工務所の設計である。本町ビルデングの経営者である篠崎半助の談話が面白いので次に紹介する。「それまでの敷地が大和軒からの借地であったこと、建物が手狭になったことの2つの理由により、現在自己所有する敷地に計画建設する事になり、設計や建設期間を考慮して5年から8年先をイメージして建物を計画した。自社店舗としてはゆとりがあるので、デパートメントストア的な意味合いを持たせることを意図し、数店の商店が入居する。設計に当たっては技術家の意見を聞き一切任せたのであるが、すでに20年来京城にいた自分の経験も生かし、本町通りに相応しい、また京城の舞台にあてはまるものを作りたいという目的でいくつかのお願いをした。元来商店建築はただ強いというだけではごつくなるので、店の正面のスタイルは入り口を低くしてどんな人々でも入りやすいことを主眼に置くこと、また、1階の階段は下足のままで上がるのに差し支えないという印象を与えるためにコンクリート仕上げとし、2階に上がったならばニス塗りの木造階段にして柔らかみを出す工夫が必要である等の事を提案した。この工事で最も苦労したのは地下室工事であり、この敷地は地下水脈のもっとも激しい場所で防水に苦労をした。この建物が今後成功するか否かは個人の問題だけでなく、この町の将来がかかっており、幸いにこの事業が成功すれば本町に堂々たる銀座通りが実現する時期が早められると大いに期待している。」（『朝鮮と建築』1925年8月号「本町ビルデングが出来るまで」）と熱く語っている。図面を見ると屋上までエレベーターが設置されており、白色化粧をしたレンガ張りビルデングのルーフガーデンには精巧なラジオが取り付けられて一般公開されるとともに、立派な望遠鏡を据え付けて簡単な観測が自由にできるようにして、盛夏の本町通りでは唯一の納涼場所を提供する計画としていた。複合商店の入居、そのためのエレベーターの採用、一般公開された屋上空間等々個人事業主の当時出現した百貨店への対抗意識が計画によく表れたモダンな商店建築である。

【本町総合ビルデング】

この建物も相澤工務所の設計で、施工は佐藤熊太郎が請負い、1926年完成の地下1階、地上3階の9人店主、1人未定の10商店用共同ビルである。建坪は134坪、延床

面積が 531 坪、1 商店当たりになると平均 13 坪、延坪 53 坪の小さな店である。敷地は本町 1 丁目入り口の中央郵便局東側角の繁華街である。京城中央郵便局からの払い下げが実現して出来上がった。本町総合ビルディングは計画当初は各商店が別々に建設することで進んでいた。餅屋は和風に、呉服屋は土蔵風に、お菓子屋は 2 階まで階段を広く取ってほしいと意見がまちまちであったが、設計者側からの提案で、共同で 1 つのビルディングを建設することにした、当時としては珍しい事例である。その大きな理由は京城の 1 等地で地価が高く、建築費をできるだけ低く抑える必要があった。またそれは各商店の隙間も壁 1 枚で済むために土地の有効利用にもつながることであった。実際建築費は 3 割減で出来上がった。地上階が店舗、上に住居、地下に倉庫が当てられた。店によっては 2 階まで店として使うところもあった。商売の種類によって階段の位置や幅が異なり、それが各店の個性を出せる結果ともなった。外観は単純なコンクリートに塗り仕上げとし、各店はショーウィンドウと看板によって特徴を出すこととした。このとき従来の横長の大きなペンキ塗りの看板は共同ビルには馴染まず、洒落た金文字の立て看板が似合っていた。この他小さな 1 階店舗面積を最大限利用するために 2 階に便所を持って行ったのも大きな特徴で、これはなかなか好評だった。この共同ビルは大きなガラスのショーウィンドウやタテ型看板の店舗ファサード、それに土地有効利用の壁共有ビルと、その後の新しい都市風景が出現してくる契機となった民間個人商店建築の好事例である。

ちなみに 1930 年代の 10 軒の商店を本町入り口側から上げれば、「日本楽器製造会社京城出張所」「菊秀刀物店」「イワヤ洋品店」「三好野」「ますや呉服店」「高木鞆支店」「甘栗太郎京城支店」「本一果実商店」「金城堂書店」「黒川精肉店」と様々な種類の商店が認められるのである。

【三越京城支店】

三越は現在の新世界百貨店である。当時も朝鮮半島でもっとも有名な百貨店であった。本町通り入り口の朝鮮銀行前ロータリー広場に面した元府庁舎跡地に位置する。地上 5 階地下 1 階の鉄筋コンクリート構造のネオ・ルネッサンス様式である。敷地面積は 730 坪余、延床面積は 2252 坪、屋上庭園だけでも 230 坪もある。設計是三越建築事務所、建築請負業者は多田工務店である。工事は 1929 年 3 月に着工し、1930 年 10 月に竣工した。

設計者の談によると、この場所は京城のなかで最も商業に適した場所であり、その外観には必要十分な配慮が検討されたのである。日本にも何回も見学に出かけた。その結果、自由な明るい感じの建築であること、そしてかつ落ち着いた親しみのある感じを出すために様式は清楚なネオ・ルネッサンス様式でまとめ、機能も徹底してお客本位にすることとした。意匠は内外の色彩の調和に注意し、彫刻や装飾は優雅で柔らかみのあるものにするものとした。また、正面をどちらに向けて配置し、玄関とショーウィンドウ

をどこに計画するか等のために何日も広場に立って計画した。また雪の降った後には人々の靴の後ろを観察して、人通りの流れと量を分析した。関東大震災の後であり、特に耐震耐火には注意を払って基礎工事や防火区画に腐心した。現場が始まると、詳細図、原寸図、模型を作って時間をかけ、作業を進めた。また施工にあたっては複雑な石工事や鋳物工事が多数あったが、出来るだけ朝鮮のなかの工場で朝鮮人、中国人の手で施行するようにした。このため工事の終わった後技術が上がり、職人が育って、難しい工事でも国外に発注しなくても出来るようになった、と工事責任者は述懐している。

各階の配置について説明すると、1階は中央広間、一般売り場、内外ショーウィンドウ、朝鮮物産陳列所、買い物相談所、ツーリスト・ビューロー、化粧室、事務室（通信販売、出納係、庶務係、外売係、職直室等）、中2階には店員用食堂等の事務用スペース、2階は一般売り場、休憩所、美容室、着付け室、及び事務室（電話交換室）、3階は一般売り場、婦人社交室、仮縫い室、仕上げ室、応接室、ベランダ、及び事務所（支店長室、仕入れ係室等）、4階は一般売り場、三越ホール、同舞台、楽屋兼第2ホール、大食堂、休憩所、及び調理室等、5階は屋上庭園、展覧会場としての三越ギャラリー、写真室及び待合所、茶室、温室及び園芸用具売り場、稲荷神社、6階には展望台がある。地階は売り場、買上品預り品渡し場、理髪室、靴磨き所、地階食堂、事務側としては調理室、金庫、倉庫、設備室等である。エレベーターは定員20名の客用が2台、店員用1台が設置された。

売り場はもちろんのこと、靴磨きから、美容、ホール、写真館、ギャラリー、屋上の庭園、展望台と、現在の百貨店でも備えることのできない多様でモダンなサービス機能が地階から屋上まで全館ぎっしりと計画配置されていたことを知り、驚くのである。

建物は1945年終戦の後、ショッピングアーケード風の「東亜デパート」に商号を変更した。その後は政府が全館を接收して米軍の生活用品店として利用していた時期もあった。1963年に三星財閥が購入し、5階部分を増築して、1979年三星直営の「新世界百貨店」として今日まで市民に親しまれて来ている。

ここまでの研究は、建物1軒1軒から、ようやく街路や通りに対象が展開してきたが、今後期待されるのは繁華街や街を対象にした研究である。つまり点から始まって線に展開し、今後はこの巡回展を1つの契機として面へ移行してのソウルの都市空間研究が行われることを若い研究者に期待したい。

本概要の「本町・鐘路」の部分は1988年日本生活文化史学会大会発表の『本町通りと鐘路通りについて～日本時代のソウル都市論』の原稿にその後の新しい知見を加筆修正している。

また本文中、当時の地名、町名、固有名詞などの呼称はそのまま用いたこととお断りしておきたい。

韓国近代の京城の内部探査

—雑誌『別乾坤』の中「(大)京城」所載の記事(1926～1934)を対象に

漢陽大学校 韓国言語文学科 現代文学専攻 教授 車恵英

1. 研究の観点：植民地近代都市「京城」と韓国の近代性研究

韓国の近代都市ソウル(京城)に関する研究は、韓国の植民地近代史の見方、ソウル(京城)の建築、都市社会学などの分野に渡っている。

1) 韓国の植民地近代の見方

(1) 収奪論と植民地近代論

(2) 「近代性(韓国のモダニティー)」研究

(3) 文化史・風俗史：消費、ライフ・スタイル、流行、風俗、百貨店、博覧会、新女性、恋愛など

*植民地近代(colonial modernity)という現象を把握するため、「規律化する権力」の構造的な力よりも「欲望する主体」の側面に、制度的強制力よりも消費文化のヘゲモニー的側面に着目してアプローチする試みへと変化。

*植民地近代人が生み出される主な社会的な場は学校・工場・監獄・警察署などの閉鎖的空間よりも、百貨店のショーウィンドウ又はモダン・ボーイとモダン・ガールが闊歩する開放された都市の街へと注目の的が変化。

2) ソウル(京城)研究の観点

(1) 分野：① 都市建築、都市景観、都市開発、近代化 ②都市社会学—貧困、疎外など、近代性と植民地性 ③視覚的対象「見られる対象」としての京城—絵葉書、写真の視覚的テキスト、展示

(2) 解釈的観点：「植民地二重都市京城」というテーマ—南村・北村/ジンゴゲ(泥岬)と鐘路/豊饒・消費と貧困・落後

(3) 既存の研究傾向から排除されたもの：その時、その時点、当時のソウルに生きていた人々のソウルについての認識、表象とは何か。

2. 研究の対象：『別乾坤』発刊期間：1926～1934／京城に関する重要特集の掲載期間：1926～1932

1) 何故『別乾坤』なのか

(1) 雑誌：民族独立、国権回復、文明開化のため読書大衆を啓蒙するのではなく、軽い読

み物を提供することへと変貌。「報道・表現・公論の場」から「再現媒体の時代」へ。

—こういう雑誌メディアの位相転換に最も代表的：『開闢』—>『別乾坤』

(2) ソウル(京城)企画

—『別乾坤』：ソウルについての自意識的表象を産み出す。

—開闢社の主要記者の殆どを総動員して、ソウルの全体を均等に分割し同時に取材するなど、様々な企画を展開。

—地域探查記事としての京城特集：『開闢』の「朝鮮文化基本調査」と比較・類推可能

—『開闢』の「朝鮮文化基本調査」企画：1923～24、2年以上の期間で全国を13道に分けて探訪・調査。各地域の青年団体、文化・宗教団体、学校、地域特産物、教育程度、遺跡地など様々な項目を調査し、以後「道号特集」として連載した。

—『別乾坤』は創刊2号から「大京城白昼闇行記」「大京城暗夜探查記」連載。

＊『開闢』から『別乾坤』へと変貌。内部コンテンツからは「朝鮮八道基本調査」から「大京城探查記事」へ移動。

＊本稿では『別乾坤』の京城特集を通じてソウルという「社会的空間」をこの雑誌が如何に作り出しているのか、できれば匿名として存在する開闢社の記者集団の独自性を明らかにし、西欧の散策者、野次馬などとは違う「東アジア近代植民地知識人であるルポ作家群の目線と書物」の位相と意味を推論・考察する。

2) 何故この時期(1926年)なのか？

1925年治安維持法の発効、植民地朝鮮内部的には高等警察制及び思想判検事制などの思想統制政策の実施、朝鮮共産党事件(1次、2次—25、26年)、6.10万歳運動、東亜日報の停刊(1926.4.19)、朝鮮日報の無期停刊(1928.5.9)、経済恐慌、光州学生運動(1929)、東亜日報の無期停刊(1930.4.17)、満州事変(1931)

(1) この時期は法、監視、物理的暴力性の次元で常に存在する植民地支配権力の抑圧が強化され、何時になく言論検閲が強化された時期である。

(2) 抵抗運動の主体

—(右派)物産奨励運動の衰え、ワシントン会議をきっかけに国際秩序、外交的交渉を通じて特にアメリカ(アメリカと日本の対立を利用して)に依存する独立可能性模索の廃棄。

—(左派)朝鮮共産党事件を通じて見るように、左翼運動の消滅、非合法化で大衆とのつながりを遮断/公論の場で遮断。

(3) 日帝支配権力の1925～26年大規模の都市イベント(京城)：ソウル市民の目に映った1925～26年の視覚的、都市景観の変貌及びイベントをいくつか紹介すると次のようである。

—1925年10月朝鮮神宮完工、朝鮮神宮鎮座祭/京城駅・京城運動場完工：行進遊戯、京城青年連合の列団式、朝鮮神宮競技、京城運動場開場式(神道様式)、動員された子供たちの連合体操、高等女学校生徒の行進遊戯など。

—1926年1月8日光化門通りで行った「日本軍觀兵式」/1926年景福宮へと総督府移転/1926年景福宮・倭城台・龍山の3箇所ですべて同時多発的に開催された朝鮮博覧会。

(つまり、1925年の秋から1926年に渡ってずっと京都市内では行列、電灯、輿、平壤航空隊の奉祝飛行があり、すべての現代式建物(銀行、企業の社屋など)には電灯飾りなどが絶えなかった。)

(4)百貨店などの日本資本の植民地への進出(ジンゴゲ)、ともにカフェなどの消費文化の大量流入、夜市の開場、昌慶苑の夜桜(花見)、博覧会、共進会などの見もの、楽しめるもの、消費と流行の広がり。

(5)映画、放送(J' O' D' K)、雑誌の変貌など。

(6)ソウル人口の急増、貧困層・土幕民の増加、無職・失職者の増加、都市下層民など

*このような状況で『別乾坤』は初めから京城を解釈し秩序化して大衆に伝えようとした。京城の全体象、京城の本当の姿、歴史、植民地化される以前と以後の京城の変化、京城の表と裏、京城の長所と短所、退廃と生産などを鳥瞰し、現象の裏を「透視」「探査」するべきであり、記憶すべきといった意識を持っていた。この特集はこのような切迫さから始まった。要するに、可視的な京城のイベント、その目が眩むほどのきらびやかさに惑わされて押し寄せる大衆、知識人には明らかに見えてくる植民地支配の企画、同時に物質的に華やかに発展する開発・近代化の圧倒感と魅惑、そしてその年に廃刊された『開闢』から垣間見える支配と暴圧また、それゆえに持たされた敗北感が絡んでいた状態であろう。

3)『別乾坤』で当時の京城を如何に表象していたのか? : テキスト内容

(1)京城の空間に性格を与えることによって分割して構成する

—白昼、暗夜/ソウルの味・情緒/良いところ・悪いところ/ソウルの特殊村/ソウルの五つの魔窟

—ソウルの心象地理/最終的な立脚点/ソウル見物案内図の路線

(2)京城の時間を通してアイデンティティ確認としての性格の規定

—歴史: 5百年に至る王都漢城の歴史と由来、史跡、踏査記

—比較: 近代韓日合併の以前と以後の地名比較、名前の意味

(3)京城について述べる者、主体の規定

—記者(匿名/筆名: 朴達成、方定煥、車相瓚、金起田)

—記名筆者: 有名人事の所懐(印象に残った感想を短く書いたもの)/踏査記/匿名の読者の体験談募集(ソウルに来てだまされた話)を通してソウルの感想記を書く主体の分布及び我々(集団主体)の境界確認

(4)その他

—名物(代表性: 産業、生産的見方から選び出す)

(5)始まりと終わり

—動いている、躍動的なソウル

3. 『別乾坤』の京城特集

1) 京城の空間に性格を与えることによって分割して構成する

(1) 白昼、暗夜：大京城白昼暗行記/大京城暗夜探査記

<目次>

A) 白昼

1. 大京城白昼暗行記、記者総出動(第1回)『一時間社会探訪』 1926. 12
2. 記者総出動、大京城白昼暗行記(第2回)『一時間社会探訪』 1927. 2
3. 記者大出動、1時間探訪 大京城白昼暗記3月29日午後2時30分から3時30分まで 1929. 4

B) 暗夜

1. タクタクギを嚮導にして、記者総出、大京城暗夜探査記、1月7日夜12時から、作者：第一隊松雀、石村(24号、1929. 12)
2. タクタクギを嚮導にして、記者総出、大京城暗夜探査記、1月7日夜12時から、第二隊、北熊、南波、昭姐(24号、1929. 12)
3. タクタクギを嚮導にして、記者総出、大京城暗夜探査記、1月7日夜12時から、第三隊 萬物草(24号、1929. 12)
4. 無駄足、タクタクギを嚮導にして、記者総出、大京城暗夜探査記、1月7日夜12時から、第四隊、微笑、青年、三石(24号、1929. 12)
5. 第五隊 記者出動(日時10月25日)、子正後の大京城 探訪(1932. 11)

*編集長は所属記者を集めて午後2時から3時のあいだに「大京城の動いている現象」を見たまま記録するようにと指令を出した。五つの組に分かれた記者たちは各自裁判所、裁判所の中の留置場、東大門の街、書店、新聞社、鐘路交差点、漢城銀行、学校、印刷所、街の屋台、鐘路警察署、大京城関門蓬萊橋、職業相談所などへと向かい、自分が見て経験したすべての事実をそのまま記録し、具体的に描写した。(たとえば、蓬萊橋一新しく開通した京城駅のチゲクン(背負い具をつけた者)やジムクン(荷物運び屋)のたまり場—の貧しさと労働人口についての精密な描写、職業紹介所では日本人の家から追い出された女中の話、田舎から上京して仕事を探している人々の事情など。)

*1929年12月号では、以前のように真昼間ではなく、真夜中の京城の裏路地を探査した特集記事が載った。「タクタクギを嚮導にして、記者総出、大京城暗夜探査記、1月7日夜12時から」である。タクタクギ(拍子木)の音を案内役にして、『別乾坤』の記者が第一隊から第五隊まで分かれて、ソウルを五つの区画に分けて真夜中の同じ時間に探査して(覗き見て、観察して、記事のネタを探して)記事にしたものである。

＊前の1926年の白昼企画が真昼間の京城、活発に動いて、生産して、学んで、労働する場所を対象にした反面、1929年12月の暗夜企画は博打場、四柱・古談クン(占い師・昔話をする人)の多い塔洞公園、その公園の真夜中の様子—ホームレス、劇場、カフェ、居酒屋、遊郭、人の家の夫婦喧嘩や密かに行われる女学生の売春の覗き見など、京城の裏路地の様子を見たまま、あるがままに記録した。

(2)大京城の特殊村/想像を超える世の中、京城の五つの魔窟

—大京城の特殊村探查記：文化村(豊かな村、文化住宅団地)、貧民村(新堂里の外土幕民村の住まいの実態/貧民村に住みながら相対的に安定的な日本人の住まい)、西洋人村(貞洞一帯)、中国人村(臭い、ホトック、アヘン中毒者)、工業村(工場地帯、生産物—ガラス、タバコ、紡績など)、労働村、キーセン(妓生)村

—魔窟探查記：吸血鬼の阿片窟/詐欺師や有象無象の輩の巢窟(パゴダ公園)/不可殺爾(好色漢)/不法売春仲介業者の魔窟/鬼神を売る奠乃魔窟(秘密の巫堂家)

(3)ソウルの味・情緒：消費都市京城

—カフェ、ジャズ、鐘路散歩、ジンゴゲ散歩、ショッピング、スクリーン(映画観覧)

(4)ソウルの良いところと悪いところ：ソウルの貧困(塔洞公園)/仕方なく生きている人々/ソウルということだけで/ソウルの人々の悲しみと喜び

(5)ソウルの心象地理：ソウル見物案内図の路線/忘れてはいけないこと

—我々が覚えておくべき京城の物理・精神的地理：この雑誌の最終的な立脚点

＊記事要約及び引用

「二日で隈なくソウル見物をする方法、田舎の親友を案内する順番」

：ソウル見物の必須コースとその内部の話・知識を一緒に提供

京城駅(蓬萊橋)—南大門—中国村—徳寿宮—裁判所—領事館—放送局—東亜日報社—光化門—朝鮮日報社—ソウル青年会/青年総同盟・権友会—大東印刷所—鐘路四街—青年会館—塔洞公園—新幹会—天道教堂—開闢社—物産奨励会—図書館(京城図書館鐘路分館)—演劇場(映画館)—(敦義洞の内外酒店：好色漢)—学生六ゴリ(交差点)(徽文、中央など)—東洋拓殖株式会社—昔の京城府庁、今の職業紹介所—西大門、独立門、監獄など。

「ソウル見物に来て忘れて帰るもの」

：私が今回ソウル見物に行って見なかったものや忘れてきたものが一体なんだったのか。博覧会場には合わせて五回も行って、総督府庁舎と博物館も見て、朝鮮神宮とジンゴゲを見て、動物園と植物園を見て、漢江鉄橋と龍山車庫も見て、奨忠壇公園とパゴダ公園を見て、朝鮮劇場と団成社を見て、明月館で宴会して、鐘路裏では立ち飲みしてバスとタクシーに34回乗ってみて、日本人の仮装行列を見て、それから、またなんだった？そうだ！商品陳列館を見

て京城日報社を見て、三越という日本人の大きい商店を見たね。それから、なにがあったけ？ そうだ！ 田舎ものとしては昔ならば手も出せない昌徳宮秘苑を見たよ。不言宮中樹というあの至尊の地を見た。光栄だね。そして、覚えてないな。見物はこれだけだった。前後9日間の車代・食費・雑費を合わせて78圓54銭使って見物はこれだけだ。

思えば悔しい限りだ。中身のないそれこそ馬鹿の無駄足だった。思えば思うほど悔しい。

いくら忙しくても社会的に有名な有志の方々を伺って地方の事情とともに彼らの政見を聞いてきたらどんなに良かったことか。天道教・仏教・基督教などの教会機関を訪れて彼らの首脳幹部たちと意見交換でもしてきたら、それがまたどんなに良かったことか。新幹会・権友会・労総青総など、運動機関はどうして行かなかったのか。東亜、中外、朝鮮、開闢社などの新聞雑誌機関はどうして行かなかったんだろう。考えるたびにたまらない気分だ。読みがいのある本一冊も、いい道具ひとつ買ってこないで、つまらない贅沢な物何個と人の頼みでなにか買ってきただけ。後、なにがあったのか？ 博覧会見物と言っても自道他道の産物ひとつきっちりできず、出品統計票すら忘れてしまっただけで改良農具名までろくに覚えてないのだ。盲目が丹青を見るようだ。一杯飲む代わりに雑誌一冊でも買ってきたら子孫にいくら役に立ったのか。活動写真の代わりに講演会に行ったらいくら参考になったのか？ 思うほどすべてが無駄だった。

2) 始まりと終わり：動いている、変化する、躍動的な今のソウル

＊記事要約及び引用

「京城街頭人物展覧」：洋服ズボン、中国服を着た婦人、洋装美人と断髪娘、社会集金人・職工の労働服と店員のスタイル、ガツ(冠)を被った老人

「大京城三部曲」：朝、電車ごとにより降りする人々は学生、社会員、職工たちである。機械がまわって鉛筆と算盤が走り、学生群が最速度の進軍をし、京城は早朝から動いている。成長している。

＊「展覧」は様々な職業群、個人性、多様性の共存を、「三部曲」は時間的躍動性、動き、活気をスケッチしている。今を「最高速度で変化する現在」として認識している時間性の前面化。

「各方面各機関、京城統計一編集室」：京城は朝鮮の首都であるために内外のすべての文化が集中されている。今の京城は20年前の京城ではなく、今年の京城は去年の京城ではない。また、来年の京城は今年の京城とかなり違ってくるはず。このように年に月に発展—たとえ、人の手にかけられたとしても—をしている京城…

4. 結論(仮案)

1) 躍動性、動いているソウル

2) 活気あふれる生産して勉強する未来へ向かう都市—その活力の中心にあるもの：青年、

学校、学生、青年会館、印刷、言論社など

3) 内部的な多様性、外部的な開放性—特殊村/近代都市化、植民地的現実の内部—魔窟、悪いところ、貧困

4) 表と違う裏面の存在—透視、探査、リアリズム：近代言論媒体、ルポ記者、リアリズム小説、大路のリアリズム/西欧的散歩者/考現学

5) 東アジア植民地の知識人が見せる全体性の空間企画：ソウルは朝鮮である

韓國近代의 京城의 内部探查

- 雜誌『別乾坤』中 ‘(大)京城’ 所載 記事(1926~1934)를 對象으로

한양대학교 한국언어문학과 현대문학전공 차혜영(車惠英)

1. 연구의 관점 : 식민지 근대 도시 ‘경성’과 한국의 근대성 연구

한국근대도시 서울(경성)에 대한 연구는, 한국의 식민지근대사를 보는 시각, 서울(경성)에 대한 건축, 도시사회학 등의 개별분야 연구 사이에 걸쳐 있다.

1) 한국의 식민지 근대를 보는 시각

(1) 수탈론과 식민지 근대화론

(2) ‘근대성’(한국의 모더니티) 연구

(3) 문화사·풍속사 : 소비, 라이프스타일, 유행, 풍속, 백화점, 박람회, 신여성, 연애 등

* 식민지 근대(colonial modernity)라는 현상을 파악하는 데 ‘규율화하는 권력’의 구조적 힘보다는 ‘욕망하는 주체’의 측면에, 제도적 강제력보다는 소비문화의 헤게모니적 측면에 더 주목하여 접근하려는 시도로 변화.

* 식민지 근대인이 생산되는 주된 사회적 장은 학교 . 공장 . 감옥 . 경찰서와 같은 폐쇄적 공간 이라기보다, 백화점의 쇼윈도 혹은 모던 보이와 모던 걸 들이 활보하는 개방된 도시의 거리에 대한 주목으로 변모.

2) 서울(경성) 연구 시각

(1) 분야 : ① 도시건축, 도시경관, 도시개발, 근대화 ② 도시사회학 -빈곤, 소외 등 근대성과 식민지성 ③ 시각적 대상, ‘보여지는 대상’으로서의 경성 - 엽서, 사진 등의 시각적 텍스트, 전시.

(2) 해석적 시각 : ‘ 식민지 이중도시 경성’이라는 테마-남촌 북촌/ 진고개와 종로/ 풍요·소비와 빈곤·낙후

(3) 기존의 연구경향에서 배제된 것 - 그때, 그 시점, 당대 서울을 살던 바로 그들의 서울 인식, 표상은 무엇인가?

2. 연구의 대상 : 『별건곤』 발간기간:1926~1934 / 경성 주요 특집 게재시기: 1926~1932

1) 왜 『별건곤』인가

(1) 잡지 : 민족 독립, 국권회복, 문명개화를 위해 독서대중을 계몽하는 것이 아니라, 가벼운 읽을 거리를 제공하는 것으로 변모. '보도·표현·공론장'의 개념에서 '재현매체의 시대'로.

- 이런 잡지 미디어의 위상 전환에 가장 대표적: 개벽->별건곤

(2) 서울(경성) 기획

- 『별건곤』 : 서울에 대한 자의식적 표상의 생산

- 개벽사 주요기자 대부분을 총출동, 서울 전체를 균등 분할, 동시 취재 등 다양한 기획으로 전개.

- 지역 탐사기사로서의 경성 특집: 『개벽』의 '조선문화 기본조사'와 대비·유추가능

- 『개벽』 조선문화 기본조사 기획: 1923-24, 2년 이상 기간, 전국을 13도로 나누어 탐방, 조사, 각 지역 청년단체, 문화, 종교단체, 학교, 지역의 특산물, 교육, 정도, 유적지 등 다양하게 조사했고, 이후 도호(道號) 특집으로 연재 했다.

- 『별건곤』 은 창간2호부터 「대경성백주암행기」, 「대경성암야탐사기」 연재.

* 『개벽』에서 『별건곤』으로의 변모, 내부 콘텐츠에서 “조선팔도기본조사에서 대경성 탐사기사”로의 이동

* 본고에서는 『별건곤』 경성 특집을 통해 서울이라는 ‘사회적 공간’을 이 잡지가 어떻게 창출하는가, 가능하다면, 익명으로 존재하는 이 개벽사 기자집단의 정체성을 부각, 서구의 산책자, 구경꾼 등과 다른, “동아시아 근대의 식민지 지식인 르포르타주작가군의 시선과 글쓰기”의 위상과 의미를 추론·고찰하려고한다.

2) 왜 이시기 1926년인가? 1925년 치안유지법(治安維持法)의 발효, 식민지 조선 내부적으로는 고등경찰제(高等警察制) 및 思想判檢事制 등 思想統制政策의 실시, 朝鮮共產黨事件(1, 2차-25, 26), 6.10 만세운동, 동아일보 停刊(1926.4.19), 조선일보의 無期停刊(1928.5.9), 經濟恐慌·광주학생운동(1929), 동아일보 무기정간(1930.4.17), 滿洲事變(1931)

(1) 이 시기는, 법, 감시, 물리적 폭력성의 차원에서 상존하는 식민지 지배권력의 억압의 강화되고, 그 어느 때보다 언론검열의 강화된 시기이다.

(2) 저항운동 주체

- (우파) 물산장려운동의 쇠락, 워싱턴 회의를 계기로, 국제질서, 외교적 교섭을 통해, 특히 미국(미국과 일본의 대립을 이용해)의존하는 독립가능성 모색의 폐기

- (좌파) 조선공산당 사건을 통해 보듯, 좌익운동의 소멸, 비합법화를 통해 대중과의 연결고리 차

단 / 공론장에서 차단

(3) 일제지배 권력의 1925-26 대규모 도시 이벤트(경성): 서울 사람들 눈에 비친 1925-1926년 한 해에 시각적, 도시경관 변모 및 이벤트를 몇가지 소개하면 다음과 같다.

- 1925년 10월 조선신궁 완공, 조선신궁 진좌제/ 경성역·경성운동장 완공 : 행진유희, 경성청년연합의 열단식, 조선신궁 경기, 경성운동장 개장식(神道儀式), 동원된 아동들의 연합체조, 고등여학교 생도의 행진유희.....

-1926년 1월 8일 광화문통에서 실시된 ‘일본군 관병식’/1926년 경복궁 총독부 이전 / 1926년 경복궁, 왜성대, 용산 3곳에서 동시다발적으로 개최된 조선박람회

(즉, 이 기간 1925년 가을부터 1926년 내내 경성 시내에는 행렬, 전등, 꽃가마, 평양항공대의 봉축 비행, 당시 경성시내에 존재하던 모든 현대식 건물들(은행, 기업사옥 등) 전등 장식 등이 끊이지 않았다.)

(4) 백화점등 일본 자본의 식민지 진출(진고개), 그와 함께 카페 등의 소비문화 대거 유입, 야시개장, 창경원 야영(벚꽃놀이), 박람회, 공진회... 볼거리, 즐길 거리, 소비와 유행의 전파

(5) 영화, 방송(J'O'D`K), 잡지 변모...

(6) 서울인구의 급증, 빈곤층, 토막민 증가, 무직, 실직자 증가, 도시 하층민 급증 등.

* 이런 상황에서, 『별건곤』은 시작부터 경성을 해석하고 질서화하여 대중에게 전달하려고 하였다. 경성의 전체상, 경성의 본래의 모습, 경성의 역사, 식민지화 이전과 이후의 경성의 변화, 경성의 겉과 속, 경성의 좋은 곳과 나쁜 곳, 퇴폐와 생산 등을 조감하여, 현상의 이면을 ‘투시’, ‘탐사’해야 하며, 기억해야 한다는 의식을 분명히 가지고 있었다. 이 특집은 그런 절박함으로 시작된다. 요컨대, 눈 앞에 휘황하게 존재하는 가시적 경성 이벤트, 거기에 현혹되어 구경오는 대중들, 지식인들의 눈에는 뵈히 보이는 식민지 지배의 기획, 동시에 물질적으로 현란하게 발전하는 개발·근대화의 압도감과 매혹, 그리고 바로 그 해에 있었던 『개벽』의 폐간이 보여준 지배와 폭압성과 그것이 안겨준 패배감이 얹혀있는 상태일 것이다.

3) 바로 그 『별건곤』에서, 바로 그 시기에, 경성을 어떻게 표상했는가?: 텍스트 내용

(1) 경성 공간의 성격부여를 통한 분할로 구성하기

- 백주, 압야 / 서울 맛·정조 / 좋은 곳·나쁜 곳 / 서울의 특수촌 / 서울의 다섯 마굴

- 서울의 심상지리 / 최종적 입각점 / 서울구경 안내도의 노선

(2) 경성 시간을 통해 정체성 기억하기로서의 성격규정

- 역사 : 오백년 왕조 도시 한성의 역사와 유래, 사적, 답사기,

- 비교 : 근대 한일합방 이전과 이후, 지명비교, 이름풀이

(3) 경성에 대해 쓰는 사람들, 주체의 규정

- 기자들(익명/필명 : 박달성, 방정환, 차상찬, 김기전)

- 기명필자 : 유명인사 소회(짧은 인상기)/ 답사기 / 익명의 독자 체험담모집 (서울 와서 속아본 이야기)를 통해 서울 감상기를 쓰는 주체의 분포 및 우리(집단주체) 의 경계 확인

(4) 기타

- 명물(대표성 : 산업, 생산적 시각으로 선출)

(5) 시작과 끝

- 움직이는, 역동적인, 서울

3. 『별건곤』의 경성 특집

1) 경성 공간의 성격부여를 통한 분할로 구성하기

(1) 백주, 암야 : 대경성백주암행기 / 대경성암야탐사기

<목차>

A) 백주

1. 大京城白晝暗行記, 기자총출동(제1회) 1時間社會探訪 1926-12

2. 記者總出動, 大京城白晝暗行記(제2회), 『一時間社會探訪』 1927-02

3. 記者 大出動 1時間 探訪 大京城 白晝 暗行記, 3월 29일 오후 2시 30분부터 3시 30분까지 1929-04

B) 암야

1. 딱딱이를 嚮導삼어, 記者總出, 大京城暗夜探查記, 11월 7일 밤 12시부터, 작성자: 第一隊 松雀, 石村 (24호, 1929.12)

2. 딱딱이를 嚮導삼어, 記者總出, 大京城暗夜探查記, 11월 7일 밤 12시부터 第二隊, 北熊, 南波, 昭姐 제이대, 북웅, 남파, 소저 (24호, 1929.12)

3. 딱딱이를 嚮導삼어, 記者總出, 大京城暗夜探查記, 11월 7일 밤 12시부터 第三隊 萬物草 제삼대 만물초(24호, 1929.12)

4. 첫물-첫물켜기, 딱따이를 嚮導삼아, 記者總出, 大京城暗夜探查記, 11월 7일 밤 12시부터 第四隊 微笑, 靑年, 三石 제사대 미소, 靑年, 삼석 (24호, 1929.12)

5. 五隊 記者出動(時日 10월 25일), 子正後의 大京城 探訪 작성자: (1932, 11)

* 편집장은 소속 기자들을 불러 모아 오후 2시부터 3시 사이에 '대경성의 움직이는 현상'을 본 대로 기록하라는 동원령을 내렸다. 5개조로 나뉜 기자들은 각각 재판소, 재판소 내 유치장, 동대문 거리, 서점, 신문사, 종로 네거리, 한성은행, 학교, 인쇄소, 거리의 호떡집, 종로경찰서, 대경성 관문 봉래교, 직업상담소 등으로 흩어져 자신이 보고 경험한 사실을 그대로 기록하고 구체적 묘사하였다. (예를 들어, 봉래교-새로 개통된 경성역의 지게꾼 짐꾼 모인장소-의 남루와 노동인구에 대한 세밀한 묘사, 직업소개소에서는 일본인집 식모를 쫓겨난 사연, 시골에서 상경해 일을 구하는 사람들의 사연 등.)

* 1929년 12월호에는 앞서 백주대낮이 아니라, 한밤중 경성의 뒷골목을 탐사한 특집 기사가 실렸다. 「딱따이를 향도삼아, 기자 총출, 대경성암야탐사기, 11월 7일 밤 12시 부터」이다. 딱따이(야경꾼-민간방법대원-의 방망이 소리)소리를 안내 삼아, 별건곤 기자가 제1대부터 제5대까지, 서울을 5등분해서 한 밤중 같은 시간에 탐사하고(엿보고, 관찰하고, 기사거리를 찾아) 기사를 쓴 것이다.

* 앞서 1926년의 백주기획이 한 낮의 경성, 활기차게 움직이며, 생산하고, 배우고, 노동하는 장소를 대상으로 했다. 반면 이 1929년 12월의 암야기획은 도박장, 사주 고담꾼이 많은 탑동공원, 그 공원의 한밤중의 모습-노숙자, 극장, 카페, 술집, 유곽, 남의 부부싸움하는 방안, 여학생의 은밀한 매춘 엿보기 등, 경성의 뒷골목 들을 본대로, 있는 그대로 다루고 있다.

(2) 大京城의 特殊村 / 想像 밖 世上 京城의 다섯 魔窟

- 大京城의 特殊村 탐사기 : 문화촌(부촌, 문화주택단지), 빈민촌(신당리 밖 토막민 촌의 사람살이 실태 / 빈민촌에 살면서 상대적으로 안정적인 일본인 살림), 서양인촌(정동일대), 중국인촌(냄새, 호떡, 아편장이), 공업촌(공장지대, 생산물-유리, 담배통, 직조...), 노동촌, 기생촌

- 마굴魔窟 탐사기 - 吸血鬼의 阿片窟 / 挾雜輩情民窟(탑골공원)/不可殺爾 (色酒家)/무쟁이의 魔窟 (密賣淫仲介業者)/ 鬼神 파는 糞乃魔窟 (비밀 무당집)

(3) 서울 맛·정조 : 소비도시 경성

- 카페, 찻집, 종로산보, 진고개 산보, 쇼핑, 스크린(영화관람)

(4) 서울의 좋은 곳과 나쁜 곳 : 서울의 빈곤(塔洞公園) / 부득이 사는 사람들/ 서울이라는 그 맛에 / 서울 사람의 설움과 기쁨

(5) 서울의 심상지리 : 서울구경 안내도의 노선 / 잊지 말아야 할 것

- 우리가 기억해야 할 경성의 물리·정신적 지리 : 이 잡지의 이 시기 최종적 입각점

* 기사요약 및 인용

「2일 동안에 서울 구경 골고로 하는 法, 시골親舊 案内할 路順」

: 서울관광 필수 코스와 그 내부의 이야기·지식의 결합

경성역(봉래교)- 남대문-중국촌 - 덕수궁- 재판소 -영사관 - 방송국 - 동아일보사-광화문-조선일보사 - 서울청년회/청년총동맹, 근우회 - 대동인쇄소-종로사가- 청년회관 - 탑동공원- 신간회 -천도교당 - 개벽사 -물산장려회 -- 도서관(경성도서관 종로분관) - 연극장(영화관) (돈의동 내외주점:색주가)--학생육거리(휘문, 중앙 등)-동양척식주식회사 -예전의 경성부청 지금의 직업소개소-서대문, 독립문, 감옥 등.

「서울구경 왔다가 니저버리고 가는 것」

나는 이번 서울 구경 갔다가 구경 못하고 온 것 니저 버리고 온 것이 대개 무엇 무엇이였든가? 博覽會場에 모도 합하여 다섯 번 드러가보고 總督府廳舍와 博物館도 보고 朝鮮神宮과 진고개 구경하고 동물원과 식물원 구경하고 漢江鐵橋와 龍山車庫 구경하고 獎忠壇公園과 빠고다공원 구경하고 朝鮮劇場과 團成社 구경하고 明月館에서 宴會 한번 하고 鍾路 뒤에서 선술 한번 먹고 빠쓰와 택시 서너번 타보고 日本 사람들의 假裝行列을 구경하고 그리고는 또 뭐든가? 올치! 商品陳列館을 보고 京城日報社를 보고 三越이란 日人의 巨商店을 보았다. 그리고는 또 업는가? 올치! 시골 사람으로는 더군다나 예전갓흐면 名啣도 못들일 昌德宮 秘苑을 보았섯다. 不宮中樹라든 그 至尊의 地를 보았다. 그것도 한 光榮일년지? 그리고는 생각이 안이 난다. 구경은 이것 뿐이다. 前後 9일동안 車費 食費 雜費 아울러 78圓54錢쓰고 구경은 이것뿐이다.

생각하면 분한 노릇이다. 實속은 아모 것도 업는 그야말로 멍텅구리 헛물켜기이였다. 생각할사록 억울하다.

아모리 밋버도 사회적으로 유명한 有志 몇분을 차저 보고 지방 사정과 아울러 그들의 政見이나 좀 듯고 왔더면 그 안이 조할슬가. 天道敎 佛敎 基督教 등 教會機關을 차저가 그들의 首腦幹部들과 의견 교환이나 해보고 왔스면 그 亦 조할 일이 안인가. 新幹會 槿友會 勞總 靑總 등 運動機關은 왜 못 차저 보앗스며 東亞 中外 朝鮮 開闢社 등 新聞雜誌機關은 왜 못 차저 보고 왔는지 생각하면 생각사록 분통한 일이다. 불만한 冊 한권을 못 사오고 쓸만한 연장 하나를 못 사오고, 쓸데 업는 奢侈品 밋개하고 남의 부탁 밋가지 해오고 그밋게 또 무엇이 잇는고? 博覽會 구경이라야 自道他道の 產物 하나 똑똑이 못하고 出品統計表조차 니저 버리고 改良農具名까지 記憶이 漠然하니 구경은 정말 소경 단청구경이 되고 말엇다. 술 한잔 안 먹고 잡지 한권이라도 사 왔더면 子孫에게 얼마나 조할스며 活動寫眞 代身에 講演會 구경이나 헛드면 얼마나 參考가 되얏슬가? 생각사록 모든 것이 제로가 된 셈이다.』

2) 시작과 끝 : 움직이는, 변화하는, 역동적인 현재의 서울

* 기사요약 및 인용

「京城街頭人物展覽」: 洋服 바지, 中國服 입은 부인, 洋裝美人과 斷髮娘, 會社集金人·職工의 勞働服과 店員 맵시, 갓쓴 노인,

「大京城三部曲」: 아침, 電車마다 나리는 사람 오르는 사람이 학생, 會社員, 직공들이다. 기계가 돌고 鐵筆과 珠板이 달음질치고 學生群이 最速度의 進軍을 하고, 京城은 이른 아침부터 움직인다. 자란다.

* 「전람」은 다양한 직업군, 개인사정, 다양성의 공존을, ‘「삼부곡」’은 시간적 역동성, 움직임, 활기를 스케치한다. 지금을 “ 최고속도로, 변화하는 현재”로 인식하는 시간성의 전면화

「各方面各機關, 京城統計-編輯室」: 京城은 朝鮮의 수도인 만큼 내외의 모든 문화는 집중되어있다. 오늘의 京城은 20년 전의 京城이 아니오, 금년의 京城은 작년의 京城이 아니니, 또 내년의 京城은 금년의 京城과 꼭 다를 것이다. 이와 가티 해로 달로 발전 - 비록 남의 손이 다왔더라도- 을 하고 있는 京城...

4. 결론(假案)

1) 역동성, 움직이는 서울

2) 활력이 넘치는 생산하고 공부하는 미래로 향한 도시- 그 활력의 중심에 있는 것: 청년, 학교, 학생, 청년회관, 인쇄, 언론사 등.

3) 내부적 다양성, 외부적 개방성- 특수촌/ 근대도시화, 식민지적 현실의 내부들 -마굴, 나쁜 곳, 빈곤

4) 겉과 다른 이면의 존재-투시, 탐사, -리얼리즘 : 근대언론매체, 르뽐기자, 리얼리즘 소설

- 대로의 리얼리즘 / 서구적 산책자(산보자)/ 고현학

5) 동아시아 식민지 지식인이 보여주는 전체성의 공간 기획: 서울은 조선이다.

近代京城の都市韓屋とその暮らし

神奈川大学工学研究所 客員研究員 金 容範

◎ 近代住宅としての‘都市韓屋’ …… その名称が示すこと

都市韓屋(ハンオク)は、韓国の伝統の韓屋がいわゆる改良韓屋へと変化した過程に建てられた住宅であり、朝鮮時代以後に持続されてきた伝統の生活様式に基づいて、新しい住居思想と折衷されながら、近代京城の新たな都市住宅として建てられたものである。時間的には、1920年代から京城の都心に登場し、1960年代のソウルの郊外住宅地までに至って続けられたといえる。

都市韓屋は、「都市型韓屋」、「改良韓屋」または「ジッチャンサジブ」(‘住宅商売にたけた商人が建てる家’の意味)と呼ばれたが、この名称らに都市韓屋の建築的な性格が端的に表われている。「都市型韓屋」というのは、都心住宅地での韓屋の立地性に注目した言葉である。反面、「改良韓屋」は、伝統の韓屋の形式に基づいていながら、新たな機能と生活の変化に合わせて改良された住宅という側面を強調したものであり、当時の生活改善運動や住宅改良運動から興った社会的な雰囲気とも関係が深いといえる。また、「ジッチャンサジブ」というのは、都市韓屋の建設主体や供給方式を示したことであり、当時の韓屋の建設は、「ジッチャンサ」または「ジッチャンシュ」と称する中小規模の住宅経営会社が敷地を買い入れて6～7軒の韓屋を集团的に建てるのが一般的であった。そのために、「ジッチャンサジブ」は、建築家より非専門的な業者が作る家という低級なイメージを持っており、日常的な言葉として、当時の時代性を表しているといえる。



▷‘朝鮮人たちの家’『モダン日本』1939)

◎ 都市韓屋の建設背景 …… 人口急増と住居階層の分布変化

近代京城における都市韓屋の建設には、京城の都市化と人口増加、民間の住宅業者らの登場がその背景になっていたが、より直接的な契機になったのは、京城の都市計画と行政区域の変化、そして、それに伴った階層別の朝鮮人住居地域の分布が変化されていたことであった。

都市韓屋が最も多く分布されていた北村(ブッチョン)は、むかしから王族を中心とした両班(ヤンバン)と官僚の高級住宅地であった。鍾路(チョンノ)より、やや北に寄っていた嘉会洞(カヒェイドン)と桂洞(ゲドン)は、最も歴史の長い金持ちらの町であり、地理的にも景福宮(キョンボックン)と昌慶苑(チャンキョンウォン)に囲まれた要地であったため、自然に権

力と地位の高い上流階層の住宅地になったといえる。それより低い地位の役人たちは、景福宮から西側の周辺一帯―内資洞(ネザドン)、通義洞(トンイドン)、社稷洞(サジッドン)など―に居住したし、庶民は、その下の鍾路一帯に集まって住んでいた。このような朝鮮人の居住地の分布は、1910年代の初期まで維持されていたが、その状況が変わり始めたのは、朝鮮総督府(以下、総督府)が「市街地建築取締規則」を発表した1913年頃からであった。総督府は、日本人の住宅地であった南村と本町一帯を初め、市街整備事業を推進したが、このような都市計画事業は、朝鮮人の住宅地にも少なくない影響を与えた。例えば、1930年代には、「朝鮮市街地計画令」の実施とともに嘉会洞と三清洞(サムチョンドン)、桂洞一帯の大規模な敷地が50～80坪程度の中小規模の敷地で整理されていった。こうした住宅地の変化に伴って京城内



▷漢城府の地図(1901)

の郊外地域と四大門の外で新たな高級住宅地が造られながら、朝鮮人上流階層の住宅地の移り変えが始まっており、1930年代には、明倫(ミョンニョン)町、恵化(ヘファ)町、新堂(シンダン)町など、朝鮮人上流階層の日本人の住宅地への拡散が目立っていた。すなわち、民族別の分化されていた上流階層の住宅地が相当に混在されていた様相が見られたが、これは、当時の朝鮮人の上流階層が旧時代の官僚や両班ではなく、植民時代に新しく成長した新興の中産層に変わっていったと窺われる。

一方、1920年代から、地方からの離脱農民や留学生の増加とともに、京城の人口が急増され、住宅難が大きな社会問題となっていた。1935年の『朝鮮年鑑』の統計を参考すると、1933年末の日本人の住宅不足率が2.75%、朝鮮人の住宅不足率が15%で、日本人と朝鮮人の差が大きくなったことがわかる。これらの住宅難が年々続けられ、1944年には、住宅不足率が40%まで上がって深刻な水準に達した。

このような朝鮮人の住宅地分布の変化と住宅不足の問題は、住宅需要の増加、言い換えれば、商品化された都市韓屋を受容できる基盤を形成しながら、住宅業者が都市韓屋を集団的に供給することになったといえる。北村を始め、鍾路や乙支路(ウルジロ)一帯の整備された地域は、住宅業者たちの主要な活動舞台になっており、都市韓屋はこのような地域を中心として短期間に増えていった。

都市韓屋の供給方式は、土地所有主と大工が結んで組織したり、経済力を持った大工が自立した組織によって供給されたのが一般的であった。なお、1920年代後半からは、既存の大工の組織を吸収した資本家たちの住宅経営会社を設立する傾向が見られる。当時、京城で活動した代表的な住宅経営会社としては、鄭世権(ジョン・セクォン)の建陽社や金東洙(キム・ドンシュ)の共営社、また、京城高工出身の建築家が運営した会社としては、呉英燮(オ・ヨンソプ)の呉工務所、金宗亮(キム・ゾンリャン)の京城材木店が挙げられる。この中で、鄭世権は、嘉会洞、仁寺洞(インサドン)、城北洞(ソンブッドン)、明倫洞等の地に毎年300余軒の都市韓屋を建設し、‘建築王’と呼ばれたという(『建築系から見た京城』、『京城便覧』 1929)。

◎ 都市韓屋の平面構成と住み方 …… 内庭形の伝統的な生活空間

都市韓屋は、商品化住宅として不特定の居住者に受容できるように普遍的な平面構成を持っていたが、平均して35～50坪の敷地で13～24坪の床面積と、コの字を成した平面形態が一般的であった。ブオク(釜屋＝台所)、アンバン(内房)、テーチョン(大庁＝板の間)、コンノンバン(越房)の一系列に連なったL字形のアンチェ(内棟)と、一字形のムンカンチェ(門間棟)によって、コの字形の都市韓屋の特有の平面形態を成していた。このような形態は、伝統的な韓屋が、都心住宅地での集合を前提として、よりコンパクトな形で変化された結果といえる。なかには、敷地の規模に従って、L字形のアンチェしかない都市韓屋や、L字形のアンチェとムンカンチェが向かい合うロ字形の都市韓屋が嘉会洞や桂洞、三清洞等地で建てられたこともあったが、いずれにしても、コの字形の都市韓屋が最も一般的なものであった。

都市韓屋がコの字形の平面構成で成り立ったのは、敷地と建築法上の制約、住宅改良の影響などの様々な要因があったが、なによりアンマダン(内庭)を中心とした伝統の住み方を持続する力が強く作用したと考えられる。一字形のムンカンチェは、道路に対して住宅の境界を区分することと、都市韓屋の特有の立面性を作り出しており、その内側でL字形のアンチェがアンマダンを取り囲むような形を取っているため、都市韓屋は、非常に閉鎖的で開放感の少ない住居空間を持っていた。

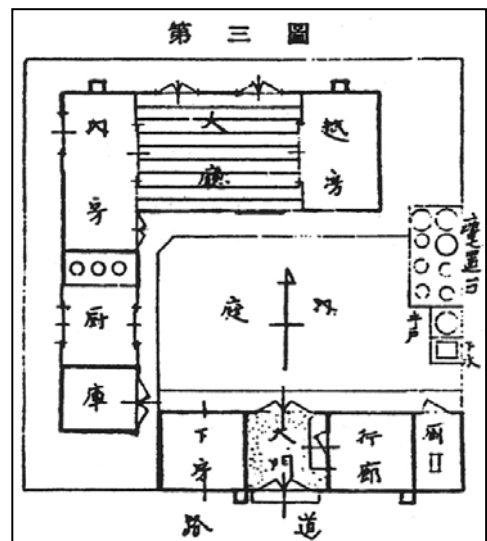
このような都市韓屋の平面構成は、伝統の民家にも

その原形を見つけることができる。民家の平面構成は、それが建てられた地方によって特徴ある形態に分類することができるが、都市韓屋に見られる一般的な平面構成は、京畿道(キョンギド)地方の民家の特徴に類似している。すなわち、近代京城の都市韓屋は、京畿道地方の民家の形式に基づいていたことがわかる。

都市韓屋の内部は、アンチェとムンカンチェの外壁が道路境界ギリギリに立てられ、堅く閉じられた大門の扉門のため、道路からはその生活や雰囲気がかく分らない。しかし、いちおう大門を入れば、正面にテーチョンが向き合って、その両側でアンバンとコンノンバンが位置している。大門の左右のムンカンチェには、ムンカンバン(大門間)と便所があり、アンバンは台所の後ろに奥深い所にいる感じを受ける。都市韓屋においてアンバンは、部屋のヒエラルキーが高く最も広いのが一般的であった。このアンバンは夫婦寝室として使われたり、寒い冬の季節の間は、食事、団欒、近い客や親戚のもてなし、裁縫、家事など、ほと



▷嘉会洞一帯の都市韓屋住宅地の全景
(『韓国現代住居学』1990)



▷建築家朴吉龍(パク・ギルリョン)が朝鮮建築会の朝鮮中流住宅調査でスケッチした‘京城地方の在来住宅’ (『朝鮮と建築』1941)

んどの生活が行なわれる部屋であった。これは、アンバンを中心とする伝統的な生活方式の特徴といえる。また、コンノンバンは、子供部屋や若い夫婦の寝室として使われることが一般的であった。

これに対して、テーチョンは、暖かい季節に食事や団欒、接客などのアンバンの機能の代わりをする場になり、先祖の忌祭祀や名節などのチャレ(茶礼)を行なう象徴性のある空間でもあった。このようなテーチョンの使い方は、伝統的な生活の特徴であるが、都市韓屋におけるテーチョンは、伝統の民家に見られる住み方とは全く異なった特徴も持っていた。それは、都市韓屋の建設の当初からテーチョンのアンマダンに面する側に建具が入って、屋内化されていたことであった。これは、テーチョンが寒い季節に使いにくい点を克服し、生活の利便性を追求した結果であった。建具は伝統の韓紙(韓国古来の製造法で漉いた紙)を使わないでガラスを使ったのが一般的であったが、その頃には、すでにガラスや煉瓦、コンクリートのような近代式の建材が普及されていたし、屋内化されたテーチョンには、椅子やテーブルなどの洋式家具を置いて応接室のように使ったりもした。こうした特徴は、住宅改良運動の影響から当時の生活が西欧化されていたことを窺えることであろう。



▷都市韓屋の内部のアンマダンの様子
(『韓国現代住居学』、1990)

このような都市韓屋での生活の中で、最も中心となった空間はアンマダンであった。大門を入って初めに進入する空間がアンマダンであり、アンバンを除いたすべての部屋がアンマダンから直接に入るのが原則であった。そのため、アンマダンは、住居内の動線上にホールのような役割をした。また、このアンマダンは、水道やチャンドクテ(醬甕台)が設けられ、キムジャン(キムチの漬け込み)や洗濯など、台所と連ねた屋外の多目的な家事空間でもあった。

◎ 変っていく都市韓屋 … 台所の床上化と西欧ライフスタイルの追求

元来、都市韓屋の台所は、土間としてつくられており、アンバンやテーチョンなどの他室より低いレベルになっていた。これは、従来の温突(オンドル)という伝統的な暖房方式によって必要とされた都市韓屋の特徴のある構造であった。しかし、現代までの暖房設備の発達、例えば、ボイラーを用いた温水床暖房への変化に従って、台所の改築が行われてきた。現在、残存している都市韓屋の事例として見ると、台所の床レベルをそのままにしてタイルを貼り、そこにキッチンユニットを設けて、立動式の台所に変化された例もよく見られるが、改造された台所のほとんどは、アンバンとテーチョンと同じレベルに床を張り、台所からアンバン、テーチョンへの屋内動線を確保するようになった場合が圧倒的に多かった。それは、食事の度に台所とアンバン、テーチョンを行き来する労働を軽減する意図もあって、リビング、ダイニング、キッチンが一室となった、いわゆるLDKを中心とする西欧化されたライフスタイルを追求した結果である。

こうした台所の床上化は、都市韓屋での住み方を大きく変化させた最も重要な現状であろう。台所の改築を伴い、テーチョンでの食事はほとんどなくなってきており、次第に西欧のリビングのような空間になってきた。また、従来の多様な生活が行なわれたアンバンも、夫婦寝室としての性格を次第に強め、西欧の生活様式と同じように個室化されてプライベートな空間になってきた。



このように、都市韓屋で行なわれてきた変化は、都市の環境に合わせて伝統的な韓屋が空間的に変った上、人々のライフスタイルの変化に従って、伝統の生活様式とは異なるもう一つの傾向であるといえる。この傾向は、現在にも継続的に進められ、アンマダンが屋内化された様子も見られ、アンマダンを中心とした生活空間の序列も次第に崩れている。

▷生活様式の変化によって改造された都市韓屋の内部の様子(ソウル城北洞所在 2009)

◎ 結語 … 伝統的な生活の持続と変容

近代京城に建てられた都市韓屋は、現在もソウルの所々に残存している。「北村韓屋村」のように観光名所化されていたり、その中では、文化財として管理されている都市韓屋も少なくない。しかし、このような管理対象に入っていない都市韓屋にも、一般の都市住宅として、過去の貴重な伝統性を持ち続け変化してきた様子がよく見られ、それがもっと重要なことではないかと考えられる。テーチョンが現代式のリビングへ、台所がダイニングキッチンへの、いわゆる機能による従来の生活空間が変わってきたが、季節によって生活がさまざまに展開された様子やアンマダンなど、伝統的な住み方は西欧化が強くなった現代の生活様式と共存しながら生きているといえよう。

근대경성의 도시한옥과 생활상

가나가와대학 공학연구소 객원연구원 김 용범

◎ 근대주택로서의 도시한옥 ... 그 명칭이 가리키는 것

도시한옥은 한국의 전통한옥이 소위 개량한옥으로 변화하는 과정에 건설된 주택으로, 조선시대 이후 계속되어온 전통의 생활양식과 도시주거지로서의 재편 그리고 주거에 대한 당시의 신사상과 절충되어 가면서 근대경성의 새로운 도시주택으로서 세워진 것이다. 시기적으로는 1920년대부터 경성의 도심에 등장하여 1960년대 서울 외곽지역의 신개발 주거지에 이르기까지 계속되었던 주택형식이라 할 수 있다.

도시한옥은 ‘개량한옥’ 또는 ‘집장사집’이라고도 불리는데, 이러한 명칭들에서 그 건축적 특성과 성격이 단적으로 드러난다. ‘개량한옥’은 전통한옥의 형식에 기초하고 있으면서도 새로운 기능적 요구와 생활양식의 변화에 맞추어 개량된 주택이라는 측면을 강조한 것이다. 이 명칭은 당시 부흥했던 생활개선운동, 주택개량운동의 사회적 분위기와도 관련이 깊다. 또, ‘집장사집’이라는 명칭은 도시한옥의 건설주체나 공급방식을 가리키는 것으로, 당시 도시한옥의 건설방식은 ‘집장사’ 혹은 ‘집장수’라 부르는 중소규모의 주택경영회사가 부지를 사들여서 6~7채의 도시한옥을 집단적으로 짓는 것이 일반적이었다. 그렇기 때문에 ‘집장사집’은 전문적인 건축가보다는 보다 비전문적인 업자가 짓는 집이라는 저급의 이미지를 가지고 있었으며, 당시의 보편적인 용어이자 시대적 분위기를 잘 나타내고 있다고 할 수 있다.

◎ 도시한옥의 건설배경 ... 인구증가와 주거계층의 분포변화

도시한옥이 건설되었던 것은 경성의 도시화와 인구증가 그리고 민간의 주택업자들의 등장이 그 배경이 되고 있었지만, 보다 직접적인 계기가 된 것은 도시계획과 경성의 행정구역의 변화 그리고 그에 따른 계층별 주거지역의 분포가 변화하고 있었던 점이었다.

도시한옥이 가장 많이 분포했던 북촌(北村)은 예로부터 왕족을 중심으로 양반과 관료의 주거지였다. 종로(鍾路)보다 조금 더 북쪽에 위치하는 가회동(嘉會洞)과 계동(桂洞)은 가장 역사가 오래된 부자촌이었으며, 지리적으로 경복궁(景福宮)과 창경원(昌慶苑)에 둘러싸인 요지였기 때문에 자연스럽게 권력과 지위가 높은 상류계층의 주거지가 되었다. 그보다 낮은 지위의 관리들은 경복궁의 서쪽 주변인 내자동(內資洞), 통의동(通義洞), 사직동(社稷洞) 등지에 거처했으며, 상민이나 서민들은 그 아래쪽의 종로 일대에 모여 살았다. 이러한 조선인의 거주지 분포는 1910년대 초기까지 유지되다가 그 상황이 달라지기 시작한 것은 1913년에 조선총독부가 시가지건축취체규칙을 공포한 이후였다. 총독부는 일본인의 거주지였던 남촌(南村)과 본정(本町) 일대를 비롯해서 시가정비사업을 추진하였는데, 이와 같은 도시계획사업은 조선인의 북촌에도 적지 않은 영향을 주었다. 예를 들어, 1930년대에는 조선시가지계획령이 시행되면서 가회동과 삼청동, 계동 일대의 대규모의 부지는 50~80평 정도의 중소규모의 부지로 정리되어 갔다.

이와 동시에, 경성 내의 변두리 지역과 사대문 밖으로 고급 주거지가 조성되어 가면서 조선인 상류계층의 주거지 이동이 시작되어, 1930년대에는 명륜정(明倫町), 혜화정(惠化町), 신당정(新堂町) 등 일본인의 상류계층의 주거지로의 확산이 뚜렷해졌다. 즉, 민족 별로 양극화 되어 있던 상류계층의 주거지가 상당히 혼재되는 양상을 보이는데, 이것은 당시 조선인의 상류계층이 더 이상 구시대의 관료나 양반이 아니라 식민시대에 새롭게 성장한 신흥 중산층으로 변하고 있었기 때문이다.

한편, 1920년대부터 지방으로부터 이탈된 농민과 유학생의 증가로 경성의 인구가 급격히 늘어나고, 주택난이 사회적으로 큰 문제가 되고 있었다. 1935년의 『朝鮮年鑑』의 통계기록만 보더라도, 1933년 말의 일본인의 주택 부족률은 2.75%, 조선인의 주택 부족률은 15%로 그 차이가 컸으며 이러한 주택부족이 매년 누적되어 식민시대의 말기인 1944년에는 주택 부족률 40%로 심각한 수준에 이르렀다.

이러한 조선인의 주거지 분포의 변화와 주택부족의 문제는 주택 수요의 증가, 즉 상품화된 도시한옥을 수용할 수 있는 여건이 조성되면서 주택업자들이 도시한옥을 집단적으로 공급하게 되었다. 북촌을 비롯하여 종로, 을지로(乙支路) 일대의 시가 정비된 지역들은 주택업자들의 주요한 활동무대가 되었고, 도시한옥은 이러한 지역을 중심으로 단기간에 늘어 나갔다.

도시한옥의 공급형태는 토지 소유주와 장인 조직이 결합되거나 어느 정도 경제력을 갖춘 대목이 자립적으로 세운 조직에 의해 공급되는 것이 일반적이었다. 1920년대 후반부터는 자본가들에 의해 주택경영회사가 설립되고 기존의 장인조직들이 흡수되거나 자체적인 조직으로 분화되는 양상이었다. 당시 경성에서 활동한 대표적인 주택경영회사로서는, 정세권(鄭世權)의 건양사(建陽社)나 김동수(金東洙)의 공영사(共營社)가 있으며, 건축가가 운영한 회사로서는 오영섭(吳英燮)의 오공무소(吳工務所), 김종량(金宗亮)의 경성재목점(京城材木店)이 있었다. 이 중에서 정세권은 가회동, 인사동(仁寺洞), 성북동(城北洞), 명륜동 등지에 매년 300여 채의 도시한옥을 건설하여 ‘건축왕’으로 불렸다고 한다. (‘建築系로 본 京城’, 『京城便覽』, 1929)

◎ 도시한옥의 평면구성과 생활방식 … 내정형의 전통생활공간

도시한옥은 상품화 주택으로서 불특정의 거주자들에게 수용될 수 있는 보편적인 평면형태를 가지게 되는데, 필지 35~50평, 주택 13~24평 정도의 규모에 ㄷ자형이 가장 일반적이었다. 부엌, 안방, 대청, 건넌방의 연속된 일렬의 ㄱ자형을 이루는 안채와 一자형의 문간채에 의해 ㄷ자형의 도시한옥만의 독특한 평면 형태를 이루었다. 이러한 형태는 전통적인 한옥이 도심 주거지에서의 집합을 전제로 컴팩트한 형태로 변화한 결과라고 할 수 있다. 간혹, 부지의 규모에 따라서 ㄱ자형의 안채만 있거나 ㄱ자형의 안채와 문간채가 서로 마주보는 ㄹ자형의 도시한옥이 가회동이나 계동, 삼청동 등지에서 지어졌으나, 어느 쪽이든 ㄷ자형의 도시한옥이 근대경성에서 가장 일반적이었다고 말할 수 있다.

도시한옥이 ㄷ자형의 평면의 형태로 이루어진 것은 부지와 건축법 상의 제약, 주택개량의 영향 등 여러 요인들이 있었으나, 무엇보다 마당이 중심이 되는 전통의 생활양식을 지속하려는 힘이 강하게 작용하고 있던 것으로 생각된다. 도로에 대하여 一자형의 문간채는 주거의 경계를 구분하는 것과 동시에 도시한옥 특유의 입면성을 만들어 낸다. 그리고 그 안쪽으로 ㄱ자형의 안채가 마당을 에워싸는 듯한 형태를 취하면서 도시한옥은 매우 폐쇄적이고 개방감이 적은 주거공간을 갖게 되는 것이다.

이러한 도시한옥의 평면 형태는 전통의 민가에서도 그 원형을 찾을 수가 있다. 보통 민가의 평면 형태는 각 지방에 따라서 특징 있는 형태로 분류해 볼 수가 있는데, 근대경성의 도시한옥에서 보이는 일반적인 평면 형태는 경기도 지방의 민가의 특징과 매우 유사하다. 즉, 도시한옥은 경기도 지방의 민가의 형식을 바탕으로 하고 있음을 알 수 있다.

도시한옥의 내부는, 안채와 문간채의 외벽이 도로 경계까지 빼듯하게 세워져 있고 굳게 닫힌 대문 때문에 도로에서는 그 생활이나 분위기를 전혀 알 수가 없다. 일단, 대문을 들어서면 정면으로 대청이 마주하고 그 양 옆으로 안방과 건넌방이 위치한다. 대문 좌우의 문간채에는 문간방과 변소가 있고, 안방은 부엌 뒤쪽에 깊숙이 들어가 있는 느낌을 받는다. 도시한옥에서 안방은 침실로서의 위계가 높고 가장 넓기 때문에 부부 침실로 사용되기도 하고, 추운 겨울에는 식사, 단란, 가까운 손님이나 친척의 대접, 재봉, 가사 등 거의 모든 생활이 일어나는 곳이다. 이것은 안방을

중심으로 하는 전통적인 생활방식의 큰 특징이라고 할 수 있다. 또, 건넌방은 자녀실이나 젊은 부부의 침실로 사용되는 것이 일반적이다.

반면에, 대청의 마루는 더운 여름에 식사나 단란, 접객 등 안방의 기능을 대신하는 장소가 된다. 또, 대청은 선조의 제사나 명절 등의 차례를 치르는 상징성을 갖는 공간이기도 하다. 이러한 대청의 쓰임은 전통적인 생활의 특징이기도 하다. 그러나 도시한옥에 있어서의 대청은 전통적인 민가에서 볼 수 있는 대청과는 사뭇 다른 특징을 나타내는데, 건설 당시부터 대청에는 마당에 면하는 쪽으로 창호가 설치되어 대청이 내실화 되어 있는 것이다. 이것은 대청이 추운 겨울에는 사용하기 어려웠던 점을 극복하고, 생활의 편리함을 추구한 결과이다. 창호는 전통적인 한지(韓紙)를 사용하지 않고 유리를 사용한 쪽이 일반적이었는데, 이 무렵에 이미 유리나 벽돌, 콘크리트와 같은 근대식 재료가 어느 정도 보급되어 있었으며 내실화된 대청에는 의자나 테이블 등과 같은 양식가구를 두어 응접실처럼 사용하기도 하였다. 이 특징은 주택개량운동의 영향으로부터 당시의 생활이 서구화 되어가고 있었음을 나타내는 것이다.

이러한 도시한옥의 생활 중에서 가장 중심이 되는 곳은 안마당이다. 대문을 들어서서 처음 진입하는 곳도 안마당이며, 안방을 제외한 모든 실은 안마당에서 직접 출입하는 것이 원칙이 있었다. 또, 이 안마당에는 수도와 장독대가 있기 때문에 김장이나 빨래 등 부엌과 연계된 옥외의 다목적의 가사공간이자 동선상 홀과 같은 역할을 하고 있었다.

◎ 변화하는 도시한옥 ... 전통생활양식의 지속과 변용

근대경성에 지어졌던 도시한옥은 현재에도 서울의 곳곳에 잔존하고 있다. 북촌한옥마을과 같이 관광명소화 되어 있기도 하고 그 중에서는 문화재로서 관리되고 있는 도시한옥도 적지 않다. 그러나 이러한 관리대상 이외의 도시한옥도 일반의 도시주택으로서 과거의 귀중한 전통성을 이어가고 있는 도시한옥의 변화가 더욱 중요한 것이 아닐까. 대청은 리빙으로, 부엌은 다이닝 키친으로 소위 기능에 따라 종래의 실 구성이 달라져 가고 있지만, 계절에 따라 생활이 다양하게 전개되는 모습이나 안마당의 전통적인 생활방식은 현대의 생활양식과 공존하며 계속하여 살아 있는 것이다.